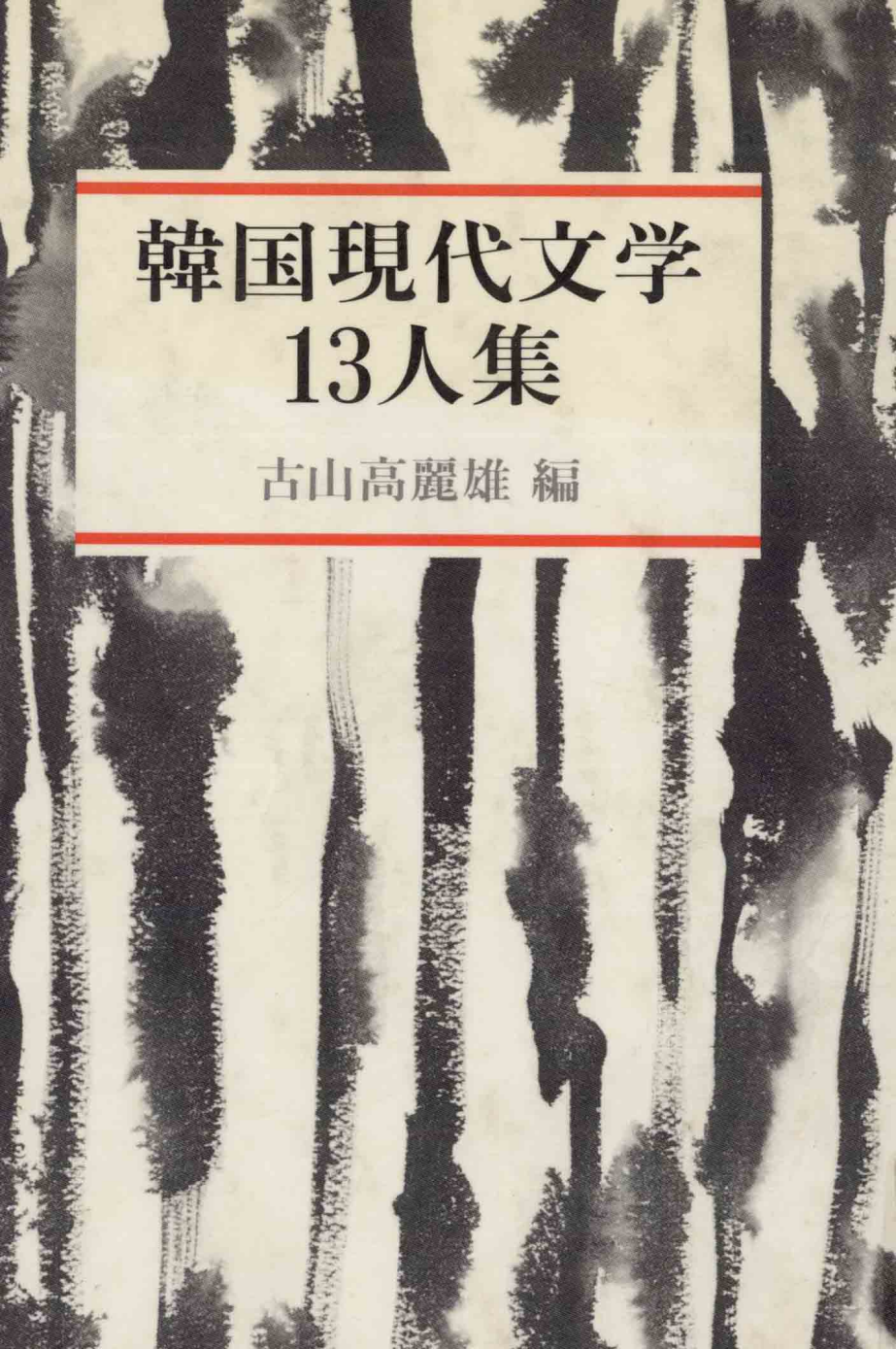




韓国現代文学 13人集

古山高麗雄 編

韓国現代文学13人集

古山高麗雄 編

新潮社版



韓国現代文学13人集

編者 古山高麗雄

昭和五十六年十一月二十日印刷

昭和五十六年十一月二十五日発行

発行者 佐藤亮一

発行所 郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地

株式会社 新潮社

電話 業務〇三(286)五一一 編集〇三(286)五四一一

定価 一七〇〇円 振替 東京四一八〇八

※丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷所・二光印刷株式会社 製本所・神田加藤製本株式会社

© 1981 Shinchosha

韓國現代文學13人集・目次

背面

海

ソウル一九六四年冬

くちなしの花の香り

海神

霧堤

盗まれた貧しさ

鮮于煇

5

崔貞熙

55

金承鉦

71

李清俊

89

韓勝源

103

尹興吉

121

朴婉緒

157

等身仏

猫を蒸す

脈

江

モルケウオルの鳥

冬の夜——ある皇帝の回想——

解説

金東里^{キムドンリ}

173

金文洙^{キムムンス}

187

全商国^{ジュンサンクワク}

201

徐廷仁^{ソジョンイン}

221

黄皙暎^{ファンソクヨン}

237

李炳注^{イビョンジュ}

251

古山高麗雄

284

装画 李禹焕

背
面

鮮^シ
于^ウ
燁^ヒ

鮮于輝（一九二二〜）

平安北道定州出生。京城師範本科卒業。一九五五年寓話的な作品『鬼神』を「新世界」に発表してデビューした。出世作は「文学芸術」に発表した『火炎』、これで東仁文学賞を受賞した。主要作品は『父』『馬徳昌大人』『白い百合』『十字架のないゴルゴタ』と長篇小説『ああ山河よ』『城砦』等。初期作品は行動的意志で文壇に一つの活力素を与えた。最近は觀照的世界に重きを置いているようにも思われる。

私は今年五十五歳になる。この歳にしてはじめて、文学の価値とは何かはつきりわかったと言え、人は笑うであろうか。私が価値と言うのは、文学の相対的価値ではなく、絶対的価値のことである。いわば、どうしても文学でなければならぬもの。文学にしか出来ないもの。政治にも経済にも言論にも宗教にも不可能なもの。それが何であるかを私は知り得たというのである。そして、だからこそ文学は、人間になし得るもっとも価値ある仕事であるということを理解したというのである。私にとって特に大事なものは、東西のどこかの国の文学の考えを受け入れた結果としてではなく、長い懷疑の末に私なりにそのことをつかんだということである。そこで、私はこれから、喜びとやり甲斐を感じながら一つの小説を始めるつもりだ。従ってこの作品は、私がそういう理解と信念を持つようになるのはじめての作品ということになるであろう。

作者

一、戦犯収容所

モンテンルバ——日本軍戦犯収容所のあることも、ほか

のどの土地とも同様、一日中降りそそいでいた陽光がいつしか消え、夕焼けに染まった美しい空ばかりが残っていた。たそがれに包まれた収容所の建物は、あまりにも静かであった。時たま、米軍の歩哨の号令が聞えるほかは、うら淋しいハーモニカの音が聞えたり、戦犯たちの低い合唱が淋しげにそれに合わせたりするだけだ。

だれもが同じく処刑を待つ身であった。彼らは暇さえあればできるだけ寄り集まり、一緒に歌を歌うことで運命の結びつきを感じ、お互いの悲しみを分かち合い、自らの非運を慰めているようだった。

仲間に加わらずに一人離れて、歌も歌わない戦犯たちも、やはり合唱の声には耳を傾け、心の中ではある共感を感じていたのだ。だが、その歌声も共感もまったく受けつけず、一切を追いやった状態で収容所の廊下の隅に坐りこみ、ぼつねんと悩みに閉ざされている一人の男があった。小さい窓の外、白く暮れてゆく空の一角を、ちょうどその時一かたまりの雲がよぎったが、彼はそれすら目にとめようとはしなかった。

彼はただ、何かを漠然と考えつづけた。

迫りつつある死を考えていたのではなかった。死が怖くてふるえているのでもなかった。いや、死をまったく怖がらないとか、死を考えていないとか言えば、それは嘘になる。

正確には、彼は今、迫りつつある死を前にして、過ぎ去った生のことをあれこれと想っていたのだ。

とは言え、彼は自分の短い生涯を、悔恨の情とともに噛みしめているというのではなかった。

実は今、彼は狼狽しているのであった。考えれば考えるほど筋道が立たず、道理も合わない過去の生活を振りかえってみて、彼はひどく狼狽していた。

太平洋戦争が終ると、フィリッピンでは、戦争責任追及の戦犯裁判によって、フィリッピン方面日本軍最高司令官であった山下大将以下数多くの日本軍将兵が処刑された。

そのとき、かつてフィリッピン米軍捕虜収容所長であった洪思翊中將も、米軍捕虜虐待の全責任を負い、処刑台の露と消えたが、彼とともに直接の下手人として処刑されたわが同胞、朝鮮人の戦犯は十八人を数える。

日が暮れてゆく収容所の片隅で、一人頭をかかえて悩んでいるこの男も、その十八人のうちの一人である。彼の苗字は林。それで、日本式改名の要もなくそのまま林でよかったが、日本語の発音はハヤシ。当年二十四歳である。

彼は、体が大きくて力が強いことを除けば、ただ平凡な朝鮮人というにすぎなかった。そういう彼が、なぜ米軍捕虜虐待という残忍な行為をし、戦犯として指名されることになったのか、彼ははたして、自分の短い生涯を心の中で整理できないまま死んで行ったのか、あるいは彼なりの

締めくくりをつけて死んだのか、作者は以下それだけを明らかにできれば満足だと思う。

二、神を持たない男

一次調書をとってしまおうと、林伍長を収容所へ帰したウッド中尉は、それまでとはまた違う疲労を感じ、チェスターフィールドを一本抜いて火をつけた。

彼は気分がたやすく切り替わらないことに立ちさえ感じていた。

それは今日、何時間もうやでも向い合わなければならなかった林の、何とも形容できない完全無欠なボーカー・フェイスがなかなか頭から離れないからだだった。

東洋人、特に黄色人種の黄色い平べったい顔が、一様に無表情で何を考えているのかわかりにくいことは知っていたが、林の顔は、黄色人種一般の無表情という次元をはるかに超えたものだったのだ。

フィリッピンの米軍収容所でも、もつとも酷く米兵を扱って、彼らの恐怖と憎悪を一身に集めていたという林。

内も外も人間とは思えない林。そういう男の精神構造や意識は、いったいどのようなようにして作られたのか。

検察官ウッド中尉の質問に対して、彼は終始一貫、「上官の命令に従った」とだけ繰り返した。

ウッド中尉は、南太平洋の離れ島で、数ヶ月間一日二十四時間の日本語特別教育を受けただけであり、日本語の能力には自ら限界があるのだが、そういう中尉にしても、林が知っている日本語の語彙は、ひょっとすると自分が知っているよりも少ないのではないかと思えるほど、林の言葉数は少なかった。いや、少ないも何もなく、林はただひたすら同じ言葉を繰り返しかえすばかりだった。

彼とウッド中尉の交わした会話がいかにも単調なものであったかは、臨時通訳として会話の補助を頼まれた学徒出身の日本軍少尉が一度も口をはさむ余地がなかったことである。

同じことが退屈至極に繰り返されるだけの問答にかなしくを起したウッド中尉が、兵士ならだれでも言うようなそんな紋切り型の答えはやめろと叫んだ時も、林は少しも表情の動かぬ特異なボーカー・フェイスでまじまじとウッド中尉を見ながら、もう一度「上官の命令に従っただけであります」と繰り返した。

その瞬間、中尉は、背筋が凍るような悪寒をおぼえた。

米軍捕虜に対する林の虐待や殴打が、戦争という特殊状況と考えあわせてみても、上官の命令を顔面どおり実行する義務の限界をはるかに超えた残虐な行為であると、中尉は考えるほかなかった。

米軍捕虜たちが、食べている時に突然食器をひっくり返

すとか、そうしておいて何々大笑するとか、衰弱しきった捕虜を仮借なく殴り、失神して倒れたところへひどい足げを加えるというような行為は、命令を実行する者としての限度を明らかに超えた、彼個人の生来の野蠻性、悪魔性の発露であり、その然らしむるところであると思えなかった。

軍隊の上官の命令というものも、常に絶対的なものではなく、場合により個人の裁量はいくらでも可能であると、この自由と人権を重んずるデモクラシーの国の若い検察官は固く信じていたのだ。

その裁量の根拠は、神から人間に与えられている良心の領域にあると彼は思っていたのだ。

たとえ神を信じないとしても、無神論者は無神論者なりに、異教徒は異教徒なりに、よき「サマリア人」としての人間性を発揮できると信じているこの若いアメリカ人、比較的よい環境で育ち大した苦勞も経験していないこの進歩的な検察官は、米軍捕虜を監視する日本兵たちの中でも残忍冷酷の第一人者として定評のあった林の非人間的罪科は、人間全体を冒瀆する犯罪として、とうてい許されるべきものではないと判断した。

遅れて戦争に加わったために、肉弾あい打つ戦場で林と直接対決する機会を逸した自分のような立場の軍人として、林のような男の罪を厳格に究明し断罪するのは当然の義務

であるときえ、ウッド中尉は考えた。

そして、それ以上に、戦争によって損われ失われた人間の性の回復のため、人間の名のもとに遂行しなければならぬ大事な儀式の一つなのだと信じた。

論理のそんな帰結に充分満足したウッド中尉は、そこでようやく気持ちを切り替えることができた。

煙草を消して立ちあがると、中尉は自分の幕舎へ行って屋敷をすることに決めた。

三、狼たちの弁明

五木少尉は、ウッド中尉からもらった罐詰のソーセージを昼に食べすぎたせいか何度も下痢をし、生気の失せた肉体を野戦ベッドに横たえていた。ふとしたことでウッド中尉の通訳をすることになり、ほかの日本軍捕虜たちよりずっと自由でのんきなのは事実だが、それを大して望ましいことだと思っているわけでもなかった。

彼は地方の由緒ある家を出で、日本で指折りの大学の英文科にいた時、陸軍の幹部候補生としてフィリッピンへ送られた。敗戦直前、編制もほぼ崩れてしまった部隊の下級将校の身で、十何人かの部下とともにジャングルで飢え死にしそうになったのだが、それを思うと、自分が生き残ったことが実に幸運な奇蹟のように感じられました。だが、

時がたつにつれ、そういう気持は薄れはじめ、今度はなほだしい自己嫌悪と限りない倦怠をおぼえて、その中にはまり込むようになった。

最近の彼の毎日は、完全な惰性で機械的に動いているにすぎなかった。

今では、収容所の中であれどこであれ、日本軍の同僚たちと顔を合わせるのが厭になり、言葉を交わすのはなおさら厭だった。

戦争に負けるということは、これほど悲惨なことなのか。栄光あり名譽ある日本軍の矜持は今や跡かたもない。いったいどこへ消えてしまったのか。

栄養充分な勝利者として意気軒昂たる米軍の白人の顔と、栄養失調からいよいよ黄色く干からびた敗者として気も弱っている日本軍捕虜の顔。むこうの立体的な顔とこちらの平面的な顔。長軀と短軀。

生地がはいばかりかデザインもしゃれている米軍服と、生地も悪く色あせてぶざまな日本軍服。今自分が着せられている、似合わないカーキ色の作業服の背中には、Pの字が大きく烙印されている。

発音も悪いしあまり上手でない自分の英語と、発音がよくて流暢でリズムカルな米兵の英語とが、当然、あまりにも対照的なことですら、今の彼には自己嫌悪のもとになっていた。

それに、日本軍戦犯たちの生體はどうだ。

米軍の檢察官に取調べを受ける時の態度が、卑怯な者はもちろんだが、泰然自若としている者でもどうしてあれほどみすばらしく見えるのであろうか。

そういうすべてが、鏡に映った五木自身の顔であり、姿であつたのだ。

その五木にとつて、今日は特別に不愉快で恥かしい日であつた。

それは、ほかならぬ林伍長のせいだつた。

あいつは、背の高いほっそりしたウッド中尉と向い合つて、石仏のようにうずくまり、何を聞かれても、ただ「上官の命令に従つただけであります」と、同じことを繰り返すばかりだつた。彼が何んでもそう言い続けると、ウッド中尉はとうとう万年筆を机の上に投げつけ、こちらに向つて肩をすくめてみせた。

その瞬間、五木少尉は、知らず知らず顔に血がのぼってくるのを感じた。

アメリカ人が呆れたという時にしてみせるありふれたゼスチュアが、五木に耐えがたい侮蔑を感じさせたのだ。

特に、ウッド中尉が瞬間五木を見上げた時、五木は侮蔑の鋭い矢が勢いよく飛んできて胸を刺すような気がした。

おまえたち日本人はどうしてこうなんだ、と言われているようだった。瞬間五木はあわてて目をそらした。そして、

この朝鮮人が日本人の恥をさらすのかと、心中ひそかに怒りと憎しみの炎を燃やした。

その炎は青かった。——いよいよ日本が減びるとしても、いくら緊急のことだつたとは言え朝鮮人まで引っぱりこむとは何たることだろう。それにしても、日本人戦犯はそれなりにセンスがあつてまだいい。だが、あいつはいつたい……だいたいあいつは少しでも感情というものを持つているのだろうか。

五木は、ますますひどくなる腹痛をこらえるのに必死になりながら、「くそっ」とひと言吐き捨てるように言い、明日おりを見てウッド中尉に、林は日本人ではなく朝鮮人だという事実を教えようと思つた。

——日本人が朝鮮人のために、恥の上塗りをさせられてなるものか。日本人は少なくとも朝鮮人とは違う。

五木はそんなふうに、自らの心に怒りを燃えあがらせることで、腹痛という肉体的苦痛から逃れようとした。

だが、翌日も、その次の日も、五木はウッド中尉に、林が朝鮮人であることを知らせる機会をつかむことができなかった。五木は自身のインテリとしての柔弱さに、ある自己嫌悪を感じたが、一方、虚栄心を含んだ安心の気持もあると思つた。

ともかくも、五木少尉は、自分がそこらでとどまつたところにある程度満足した。

三日後、ウッド中尉は、頑固に「上官の命令に従った」と繰り返している林から、その上官というのが森軍曹であることを聞き出し、すぐに憲兵隊へ連絡して、日本軍捕虜収容所から森軍曹を証人に呼び出した。

それまでにウッド中尉は、臨時通訳の五木が、林の話を伝える途中、何となくためらうような様子を何度か見せるのに気づいていたが、彼は敢えて五木にそのわけを聞こうとはしなかった。

さまざまな場面で、日本人捕虜たちがお互いをかばい合うのを、ウッド中尉は知っている。同じ境遇、同じ立場に立てば、自分もそうするだろうと彼も思うことがあった。

だが、見えすいていることを無理に否定するような時は、そんなにまでしなくてもいいのにと、心の中で笑いました。五木のようなインテリがと、そんな時々情けないようにも思ったがそれは知識のあるなしにかかわらず、それ以前の人間感情というもののだと理解しながらも、日本人の場合、ほかの国民よりずっと、同胞をかばう気持が強いのかも知れない、と彼は考えた。

ともあれ、ウッド中尉は森軍曹を呼び出したのである。現れた森を見ると、中尉は、君は柔道をしたことがあるか、と聞いた、森は、あると答えた。

肩ががっちりとは広く、上体より下半身のほうが短い森の体を見て、調書とは関係なく無関心に聞いた答えが、自分

の予想に適中したので、ウッド中尉はいささか満足であった。

そんなささやかな満足が、森に有利にはたらくことになった。

そのうえ森は、ウッド中尉に向い合って坐る時、椅子の端に注意深く尻をのせ、答える声も静かで、女性的なほど丁寧だった。

しゃべる時絶えず首を上下左右に動かす森の癖も、その日はなぜか不愉快な感じがしなかった。

だが、ウッド中尉は、わざと厳格な調子で口を開いた。「森軍曹は林伍長に、米軍捕虜を虐待せよと命令した事実はあるか」

五木の通訳を聞いている森の表情は、黄色人種の表情がどうしてこれほど豊かかと思うほど動き、その変化には、ウッド中尉の心にまっすぐ働きかけるような力があった。目を五木からウッド中尉に移した森は、哀れっぽい顔になり、訴えるように話しはじめた。

「とんでもない。そんな事実はありませんです。わたしは、子供のころ、小学校でワシントンの桜の木の話聞き、リンカーンが正直だった話も教わりました。それに、わたしの家は名誉を尊ぶ武士階級の子孫であります。わたしは小さい時、父親から日露戦争の話聞かされました。日露戦争の時、わたしの郷里では、ロシア人の捕虜をたいへん丁

重に扱ったということでありました。わたしは部下たちに、米軍の捕虜を大事にしなければならんと、口を酸っぱくして言い聞かせましたです。虐待は絶対にいかんと言いましたです。しかるに、林伍長は、どういうわけかわたしの指示を聞こうとせなんだのであります」

そして、五木のほうをひよいと振り向いてから、

「あ、思い出しましたです、少尉殿。いつだったか、林伍長があんまりむちゃに米軍捕虜を殴りおまして、わたしは見るに見かねてやつに飛びかかり、皮のベルトを引ったくったことがありますです。そのことは皆知っている事実であります。当時の収容所勤務兵はむろんのこと、米軍捕虜も知っております。それはほんとうであります。だれに聞いてくださっても結構であります」

そんなふうにしやべる森の目には、何か異様な、歓喜にも似た生気が動いているように見えた。彼は五木を見、哀願するようにつけ加えた。

「少尉殿！ 今の話をはっきりお伝え願います。どうぞお願いであります」

五木のつかえがちな通訳で森の主張を聞きとったウッド中尉は、林が捕虜の米兵を殴って上官の森に制止されたという新しい事実を知ったが、同時に、これまで日本人捕虜や戦犯たちに、お互いをかばい合う一種の美德を見てきたのに、森の場合は、目を輝かせながら部下の林に責任を押

しつけようとしている、そのことに多少の不審を感じた。それはなぜなのか。そこで中尉はこう尋ねた。

「森軍曹は、ひよっとして、林伍長に何か個人的な感情をいだいているのではないか」

すると、森はふとためらう様子を見せたが、はつきりと答えた。

「そういうことはまったくありません」

「それでは、林伍長はおまえの部下の中でもっとも残忍な性格の持主であると思うのか」

「もちろんそうであります」

ウッド中尉の質問と森の答えとのあいだには、ほとんど一秒の間もなかった。

森の答えにあまりにもためらいのないことがやはり不審だったが、ウッド中尉はそのまま、森に対する訊問をひとまず終えようと万年筆を置いた。ところが、その時森が突然ひとことつけ加えた。

「彼は朝鮮人だからであります」

言葉の意味がすぐにはわからず、ウッド中尉はつと顔をあげて森を見、それから五木を見た。瞬間、五木の顔に、妙な表情が動いたのを中尉は見逃さなかった。ウッド中尉はす早く五木に聞いた。

「今彼は何と言ったのか」

五木はしばし間を置き、答えた。

「林は朝鮮人であると言っています」

「朝鮮人？」

「日本人ではないということですよ」

「日本人ではない？　林が？」

「そうです」

ウッド中尉は、いったい何の話だというふうにしめ面をした。

「彼が日本人でなければ、いったい何だと言うのか？　馬

か、牛かでなければ犬だと言うのか？」

五木はあわてて答えた。

「コリアン！　そう、彼はコリアンです」

「コリアン？」

ウッド中尉は言葉尻をうんとあげた。

太平洋戦争が終ったばかりという時期である。米軍の一
中尉のアジアに関する知識の中に朝鮮はなく、コリアンが
どういう人種か、すぐにわかるはずはなかった。

五木が、背後にかかっているアジア地域の地図に近寄り、
小さい一点を指した。ようやくウッド中尉は、米第八軍が
その南半分を占領している半島がコリアであり、その住
民がコリアンであることをあらためて悟った。

五木の説明をしばらく聞いてから、ウッド中尉は、コリ
アンが日本軍に編入されて戦争に参加したいきさつを知っ
たが、日本人とコリアンの関係、及びその人種的相違を、

はつきり実感するのはむづかしかった。

「たとえば、日本人をアメリカ人とすれば、コリアンはど
ういう人種と比較できるのか」

ウッド中尉はそう聞いたが、五木は最初、アメリカ・イ
ンディアンと言ったり、プエルトリカンだろうかと、言っ
たりした。

それでも中尉は釈然としない様子で、また尋ねた。

「アメリカ人に対するフィリッピン人ではどうか」

五木は答える代りに、まあそんなところでいいでしょう
というようにうなずいた。

彼は、イギリス人に対するアイルランド人と言おうとし
てやめたのだ。

敗戦のこんな状況下で、日本人にせよ朝鮮人にせよ、イ
ギリス人やアイルランド人に比較できるものではないと思
ったからだ。

五木のそんなためらいを見て、ウッド中尉はつぶやいた。
「顔の特徴や皮膚の色から見て、米国の白人とフィリッ
ピン人との違いと言うのはおかしいようだ」

ウッド中尉はそう思いながら五木を見つめ、ただニッと
笑った。

翌日、林と森を目の前で対面させ、ウッド中尉ははじめ
て、日本人とコリアン即ち朝鮮人との違いを知ることがで
きた。